



地井さんがたずねると、店内から顔を出したおばさんが「琉球アサガオだよ」と教えてくれた。

「ちょっと前なら、もっとたくさん花がついていたんだけどね。そのときに見てもらいたかったよ」

「いや、十分きれいだよ。東京じゃ見られないから、いい思い出になったな」

商店街は会話を買うところ、散歩は見知らぬ人や文化と交わる交差点

点——そんなこだわりを持つ地井さんにとって、この半日の行程はなかなか充実したものだったようだ。

「あれ、あんたテレビに出てる人じゃない？」

「ひでえな、いまごろ気づいたの？」

下関の人は飾り気がなく、話している肩がこらない。地井さんとおばさんの笑い声が、夕食の買い出しでにわかになぞわめく商店街にひととき大きく響いた。



どが入る長門プラザ、銘菓「巖流焼」を扱う和菓子屋、素朴なたばこ屋などが軒を連ね、店の人とお客さんとの会話があちこちから聞こえてくる。

「デパートやスーパーにはなくて、商店街にあるものってわかる？ 会話だよ。子どものころはよく買い物に行かされたけど、ものを買に行くというよりは、会話を買いに行っていたような気がするな」

地井さんはそういつつ韓国衣料の店やキムチ店をのぞいて、店の人との会話を楽しんでいる。

関釜航路があり、朝鮮半島への玄関口だった下関には、戦後、全国から韓国・朝鮮人が集まってきた。現在の長門市場周辺には闇市が形成され、邦

楽座通りと呼ばれていたグリーンモールにも身動きがとれないほど人があふれていたとか。そのため、いまもこの界隈には焼肉店や韓国食材店が多いのだ。

「東京の新大久保界隈にも韓国系の店が集まっているよね。あそこはあと20年か30年すると、横浜の中華街のようにステイタスのある『コリアン・ストリート』になるかもしれない。

それとおなじように、ここにも可能性が開けていると思う。下関の土壌をベースにして韓国・朝鮮系の人たちの

力を結集できれば、新大久保とはまた違ったコリアン・ストリートが作れるんじゃないかな」

近くの焼肉店「赤提灯」で名物「とんちゃん鍋」（下関風ホルモン鍋）をつつきながら地井さんが語ってくれたのは、そんな下関への応援メッセージだった。

「だって、下関にはいいものがたくさんあるじゃない。それを生かせば、茶山通りや長門市場だって、ショッピングセンターに負けないほど魅力的なところになれるよ」

帰り道、グリーンモールと茶山通りの交差点に近い商店の軒先で、福仙寺の石垣に咲いていたのとおなじ紫色の花を見かけた。木化した蔓が歩道にかかるテントの上まではい上がり、鮮やかな花をたくさんつけている。「これはなんていう花？」

「食が元気な街はうれしいね。なんか本能的にそう感じるよ」